

中国農村百景

『山西文学』短篇小説集

小林 栄編・訳



〈著者紹介〉

小林 栄 (こばやしきかえ)

1926年 長野市に生まれる。

1943年 長野県長野商業学校卒業。
日本曹達株式会社、滝沢
木工株式会社勤務。

現 在 長野県埴科郡坂城町株式
会社都筑製作所取締役経
理部長。

1966年よりNHK中国語
ラジオ講座・テレビ講座
を中心として独学で中国
語を勉強、現在に至る。

訳 書 馬峰著『私の最初の上司』
(長野市山崎書店)

現住所 長野市早苗町81-4

☎ 0262(32) 8031

中国農村百景

定価 1,500円

昭和57年3月5日発行

著 者 小林 栄

発 行 所 銀河書房

長野市稲葉上千田143-1

いなばビル

電話 (0262)27-0497・8

郵便380 振替長野16395

印 刷 ネオ・プリント企業組合

中国农村百景

『山西文学』短篇小说集



はしがき

ここに編集翻訳した『中国農村百景』は、中国山西省太原市で発行されている、文芸雑誌『汾水』^{フエンスイ}の一九八〇年八月号より十二月号の中から、私がえらんで編集し翻訳したものです。約一〇年間続いた四人組支配の時代が終わったあと、中国農民の生活はどう変化しつつあるか、中国農村は今どんな問題をかかえ、どう発展しようとしているか……、こんな観点からこの雑誌のたくさんあった小説の中から、特に七編をえらんでみました。日本人の中国紀行が数多く発行され、中国に行かれた人達がそれぞれ異った感想を持って帰国され、紀行文を発表されておりますが、これは中国人自身によつて書かれた小説であります。新しい中国を知る上で、また最近の中国文学を知る上で、いくらかでも参考になれば訳者として幸甚に思います。農村問題を、それぞれの作家がちがった角度からとらえているので、題名を『中国農村百景』とつけました。

訳者

中国農村百景——もくじ

はしがき・3

くわの柄えはんハオヒヤン韓宝山

張石山・7

趙チャオ三勤

賈大山・49

降りつづく秋雨

鄭義・69

酒の酔いから今さめて……

楊茂林・127

二十八人目の人物

田東照・157

秋の収穫の頃

韓文洲・191

皆な同じ世界だ！

趙新・209

あとがき・249

くわの柄韓宝山

張 石山

著者略歴

張石山は現在三十三歳。山西省孟県紅崖底村の出身で、幼い時から学校に学びながら、畑作業をしたり、たきぎ捨いをしていました。一九六〇年、一家は太原に移り住むようになり、初級中学・高級中学を卒業、労働者となり、二年解放軍にも服役しております。一九七八年から「汾水」編集室に勤務して、編集のかたわら、著作活動が続けている青年作家であります。「最後の冲刺」（最後のダッシュ）「晩来的摔跤手」（おくれたきたレスラー）など、農民だけでなく多彩な人物を描き、中国でも注目されている作家であり、この「くわの柄韓宝山」は、人民文学雑誌社の選考による一九八〇年全国優秀短編小説当選作品であります。

一 くわの柄えについて

韓家山ハンジャヒヤン 一帯の百姓たちは、特別に人をののしる言葉を使っている。それは「くわの柄え」と言うのだが、どうして言われ始めたのだろうか？

百姓は使いやすい道具を好み、いろんな道具の柄えにも大変難しいことをもとめ、調子が良くすべらからで丈夫さを大切にしていた。「小さな葉の桐・大きな葉のえんじゅ、くぬぎは百年も使える」という言葉も、主にくわ（鋏）の柄えについていわれているのだ。

韓家山ハンジャヒヤンの多くの人はみんな、何代も使われた四、五本のくわの柄えを持っていた。よその地区で人をののしるのに、「丸太ん棒」「洗たく棒」などと言うのと同様に、韓家山ハンジャヒヤン一帯の百姓は、くわの柄えは他の材料より一層堅く丈夫であれば、使い始めるとさらに具合が良いと考えているので、「くわの柄え」と人をののしるのは、特に深い意味を持っていた。

理屈に合わない話をしたり、大いに口論し合ったり、ひどくかたくなだったり、あまりにもまじめすぎるものに出会ったとき、みんなは一言「くわの柄え」とどなることが多いのである。「くわの柄え」とは、つまり何をののしるのが主なものか、決まった解釈というものもないが、「胸の中ではわかっていても言葉でうまく言えない」意味があるのだ。もしそうでなければ、

ののしる方ものしられる方もそれではなっとくするはずがない。

韓宝山ハンパオヒヤンは生まれつき至って片意地で、ただ理屈を通して、人に「くわの柄え」とののしられる回数が特に多く、長く続いているうちに、ついに「くわの柄え」という綽名あだながついてしまった。こんな綽名がついてしまうと評判も高くなった。評判が高くなると、嫁のきてさえなくなり、母親は心痛で胃を痛めることが再三続いた。隣のおしゃべりの二お婆アルさんが、溜息をつけて人によく話していた。

「アア！宝山パオヒヤンの母親も後家さん通して仕事してきて、やっとしんぼうして宝山パオヒヤンの大きくなるの待っていたが、みすみす自分でまだ明かりを消さなきゃならないよ！」

ところが何と、韓宝山ハンパオヒヤンは大いに人の予想を裏切つて、ついに花のようにきれいな花嫁をもらったのである。二お婆アルさんの宣伝するところによると、彼の花嫁は「自由恋愛」によるもので、しかもその「くわの柄え」の気質にほれたのだという。

二 綽名の由来

韓宝山ハンパオヒヤンが「くわの柄え」の綽名をもらったのは、いったいどんなことによるのだろうか。一つ一つあげるとは難しい。主なことをとり上げるとすれば、大体二つのことにしぼられるだろ

う。

宝山バオヒェンの父は早く亡くなり、母は子供を可愛いがったけれども、しかし型通りに山里の人が言う「男の子は十年以上ただ飯食わすな」というきまりを守って育てた。

宝山バオヒェンは十歳になると水を汲み、たぎぎを切り、走り使いや雑用をし、家の中の半分以上の仕事になつており、おしゃべりの二お婆アムさんは、いつも隣で誉めていた。

「金をためるには子供のあるのが一番だ」というが、お婆さんは運者だよ……」

母は聞いて大変安心し、宝山バオヒェンも聞いて大いに気を良くしていた。

ある時、宝山バオヒェンがたぎぎを切つて帰つてくると、すぐ母が呼びかけた。

「宝山バオヒェンや！少し休んだら水を汲みに行つてくれないか、ご飯作る水が無いんだよ！」

二お婆アムさんがちょうど豚にえさをやりながら、この話をききつけて、隣からどなった。

「イヤー、宝山バオヒェンや！大きくなつてだんだん仕事ができると思つたら、母さんにご飯の水さえ用意してないんかい！」

宝山バオヒェンは顔には出さなかつたが、首をのびして水がめの中をのぞきこみ、鍋をその前に持ち上げて、それから頭を突つ込んで、かめの底の水を汲み出し、ちょうど鍋を一杯にした。それから身体を起こすと、首を横に振つて母にむかつてどなった。

「これがご飯の水が無いと言ふんかい？」



「これだけ使ってしまったら、次の分はできないものね?」
「もしこれから一年中のご飯の水をみんな用意しなきゃならん
なら、家にダム作っておかにならんぜ……。これで、ご飯作
るに足りないのかね?」
「今度のご飯が間に合えば、水を運ばなくとも良いというんか
い?」
「誰が水を運ばないと言っているかい? 俺はご飯を作るの
に間に合うかときいているんだよ?」

「間に合う！ 間に合うよ！ やかましい奴だな！」

宝山パオヒヤンはこう言つて母をせめつけると、鍋を持ち上げて、高々とあげると、「ザーッ」と水がめの底にもどして、隣にむかつて大声でどなった。

「俺んところには飯をたくくらの水はあるぜ！」

そして満足そうに水桶をかついで出かけていった。

母は鍋をぐつと奪いとることもなく、自分で腰を曲げて、空になった鍋に水を汲んで、小さな声でつぶやいた。

「くわの柄えのような気性だ！ 理屈があれば人に負けんんだから、お前のおやじとそっくりだ。くわの柄えだよ！」

母は小声でつぶやいたのだが、二アルおばさんの耳は特別に良く聞こえる方で、いつものように耳にすると、いつものように宣伝し始めた。

「イヤー、宝山パオヒヤンの母ちゃんえは息子をくわの柄えだとどなったよ」

これが最初の第一件であった。

韓宝山ハンパオヒヤンが「くわの柄え」の綽名をもらったのは、主にはやはり二回目の一件であった。

文化大革命中、上級組織は良品種のコーリヤンをまくことをよびかけ、牛村公社ニウツンも決然とし

てこれにこたえ、農民全部の畑にコーリヤンをまくことを強制した。

公社の民政事務担当の耿玉京コンユクワンは、春の耕作の督励の責任を持って韓家山ハンジャヒヤンにやってきた。事務担当というのは大きな力のある官職とはいえないが、農民の前へくると、それは上級政府の代表であり、ひと声命令すれば誰がそれにそむいて反抗できようか？ 収穫の秋になると、畑は「一面赤く」なり、脱穀場は「赤一色」に変わり、各家庭にも赤いコーリヤンだけが配給された。

公社員にはいろいろ異議があつたが、耿玉京コンユクワンは会議を堂々と開いて報告をし、良い品種のコーリヤンは「栄養価が高く」「ビタミンを多く含んでいて」「特別においしい」と説明し、また「解放以前には、これさえ食べられなかつたんだ」などと話した。みんなはブツブツと「あんたも四、五日食べてみたらいい」と文句を言っていた。

みんなブツブツ言うのはかげ口で、どこの家でも耿玉京コンユクワンの食事は、おいしい食べ物を調理してやろうとしていた。韓家山ハンジャヒヤンは古くからの解放地区で、誰が「活動家」にまづい食事など出そうか？

さて、この日、耿さんコンの食事は韓宝山ハンパオヒヤンの家の当番になった。母は急いで歩きまわり、宝山パオヒヤンに支部書記の家へ白い粉に換えにいくようにすすめた。——支部書記の二番目の息子が県の食糧センターで仕事をしており、一斤マンのコーリヤンで一斤の麦と取り替えてくることができ、また、

一斤の麦を二斤きんのコーリヤンと換えてくれるので、この家には白い小麦粉を絶やしたことがなかった。思いがけず、宝山パオヒヤンは少しも動かず、

「コーリヤンで作ろうよ！ 先生がこれはおいしいと言ったんだから！」

「そうだよね！ だけどそうは言っても、いざ食べるとなるときらいで食べられないよ！」

「先生がそう言うんだから食べてもらおう！」

宝山パオヒヤンは一家の大黒柱だから、母はどうしてその意見を曲げられようか！ コーリヤンを三回も水で洗いすぎ、コーリヤンの粉を二回ふるいにかけてが、ただ雑穀をこまかにするだけだった！

朝食は、コーリヤンのかゆと、コーリヤンの粉のせんべいにした。

耿玉京コシユウジンは眉をしかめ、せんべいを半分くらいつまんで、しばらく口に入れていたが、なかなかのみ下せないでいた。宝山パオヒヤンは六、七枚まるめると、大きな口をあけて食べながら、

「耿コシさん！ この良い品種のコーリヤンは、栄養価が高い」のに、どうしてわざわざ半分くらいしか食べんですか？」と言った。

耿コシさんは彼をにらみつけて、何も言わなかった。

昼には、コーリヤンの蒸しご飯と粉のうす焼きを出した。

耿コシさんはにが顔をして、お碗に半分のうちうす焼きをとり上げたが、しばらくしても食べ終わ

らなかつた。宝山は大きなお碗をかかえこむと、大きな口をあけて食べながら、

「歌さん、この良い品種のコーリヤンは“ビタミンを多く含んでいる”のに、どうして半分しかあがらないのですか？」

歌さんは口をあけたままで、だまつていた。

夕食には、コーリヤンのかゆと、粉の蒸しパンを出した。

歌さんはいやな顔をして、おつゆだけ飲んで、振り向いて出かけようとした。宝山は入り口まで追って行き、引きとめて、

「歌さん、良い品種のコーリヤンは“特別においしい”のにどうして食べないで行ってしまうのですか？」

歌さんはその小さな白い顔を真っ青にして、

「こいつめ、お前はわざといやがらせをするな！」

「むしろ解放以前は、これさえ食べられなかったが、今ではあんたのお陰で、一日三食赤いコーリヤン食べられるのに、どうしていやがらせなどするものかね？」

「お前は本当にくわの柄だよ！ かみさんをみつけれられないのも無理ないぞ！ 徹底したくわの柄だわ！」

歌玉京は憎々しげに、こういうと立ち去った。